

兄の「性」／妹の「性」をめぐる物語

——大江健三郎『静かな生活』論

松本拓真

1. はじめに

ともかく私らの家族は、まさに同時代を生き抜いてきました。
〔…〕長男は養護学校の高等部に通っていましたが、その頃、
住んでいる近くで少女が乱暴な目にあつたらしいという噂を耳
にすると、もう私らはビクツとしました。根拠はないんですが、
私らがイノセントな少年だと思っている息子に別の側面があつ
て、どこかで少女を襲つたんじゃないかという不安に取りつか
れる。そういうことが現実になつた瞬間、自分ら家族が社会と
完全に対立する。それからの社会と個人生活の不安定さ、自分
たちを待っている危険性も思う。そして次第に、息子の妹であ
る少女が、実は違う犯罪者がいて、そいつがこの町に忍び寄っ
てきている状況を発見する。そこで心が晴れて、子供との関係
も家庭の中で新しい色彩を帯びる。それを書いたのが『静かな

生活』という小説です。⁽¹⁾

以上は、大江健三郎が八〇年代における自身の家庭を取り巻く日
常の緊張と不安について言及したものである。本稿が考察の対象と
する『静かな生活』（講談社、一九九〇年一〇月）は、右の引用の
末尾に記されるように、大江が八〇年代に感取していた、障害があ
る息子が「どこかで少女を襲つたんじゃないかという不安」、つま
りは大江光の「性」の問題を題材として創作された作品である。

『静かな生活』は、「静かな生活」（『文藝春秋』一九九〇年四月
号）、「この惑星の棄て子」（『群像』一九九〇年五月号）、「案内人」
（『Switch』一九九〇年 MAR Vol.8 No.1）、「自動人形の悪夢」（『新
潮』一九九〇年六月号）、「小説の悲しみ」（『文学界』一九九〇年七
月号）、「家としての日記」（『群像』一九九〇年八月号）の六つの短
篇から構成された短篇連作集である。「ピンチ」を抱えた父Kが母
を連れて渡米したために、障害がある兄イーヨー、彼の保護者役を

担う大学生の長女マーちゃん(以下、「私」と表記)、浪人生の弟オーちゃんを含めた「子供たちだけの家族半分」を、Kの友人である重藤さんと彼の奥さんが陰で支える。

以上の設定のもと、『静かな生活』は、日常に孕む「ピンチ」に翻弄される家族の様子を綴った、「私」の「家としての日記」の改訂版という体裁をとっており、「私」の一人称語りによって物語は展開される。

大江は、この娘を語り手に設定した利点について二つ挙げている。一つが、「父親というものを小説のなかからどんどん遠ざけ、背景のうちに沈ませ、子どもたちが全面に出てくる」こと。もう一つが「娘の声、文体を借りて批判しようとすると、すっきり納得できる形で自分自身が批判できる」こと。こうした大江の方法意識を考えると、かつて彼が『静かな生活』以前の作品に、「父親として自分が上位にあつて、子供が下位にある」という「権力関係」がみられることに懸念を抱いていたことが想起される。子供達の生活を前景化し、娘の視点を介して自己批判を行うという、語り手の「私」に仮託された大江の方法意識には、父と子供の「権力関係」の「解体」を指すという狙いが透けてみえる。

従来の批評・研究は、こうした大江の自作解説に引きずられてか、主に『静かな生活』における大江の「ナラティヴの手法」に主眼を置いてきた。柴田勝二は、「作者はKの位置に立つて、父親が不在の間家長として、イーヨーの共生者として振舞わざるをえなかった

娘の身振りを自己に与えようとしたのであり、それが自分自身の中にある「なんでもなさ」をあらためて確認させ」ることになったと指摘する。

対して、島村輝は、「私」が語り手に採用されたことで、「K—イーヨー」の枠でとらえきれなかった、登場人物相互のことばの葛藤が描き出されることが可能となった」と説きつつも、「マーちゃん—イーヨー」という関係性を「再構築」したからといって、「(ナラティヴ)の枠組みがある固定した(権力関係)を前提としたものであるのを逃れることはできない」と続け、「この固定化をも逃れようとするなら」「語り手自身を不安定なものにするしかない」と指摘する。

島村は、柴田が重視する「(なんでもない人)をめぐるの登場人物の言説や(おまえのために、他の人間が命を棄ててくれるのか)という問いといった主題系の重みはむしろ後景にしりぞ」いているという見方のもと、「(ナラティヴ)の枠組み」が孕む「(権力関係)」を回避するために施された、「語り手である「マーちゃん」の認識を揺さぶり、解釈をハミ出していく(夢)や(邪悪な心)といった、大きなストーリーに回収されえない部分がむしろ強い文学的喚起力をもっている」と説く。島村は「語り手である「マーちゃん」の認識を揺さぶり、解釈をハミ出していく」ものの例として、ここでは「(夢)や(邪悪な心)」を挙げているが、『静かな生活』において「私」が「意味付けよう」にもそこからすると逃れていく重要な

事柄として、ひとつにイーヨーの「性」の問題が考えられる。

また、河内重雄は、「知的障害児も共に生きていく社会のモデル」⁽⁸⁾「静かな生活」という大きなモデルは、受け入れ可能な表象へ変わっていくため、中心への移動をとまなう、「障害の受容」へのプロセスというモデルと、同じく中心への移動がみられる、知的障害者による自己表象というモデルとを併せ持つものである」と指摘し、この「二つのモデルを社会が兼ね備えることの必要性を『静かな生活』は示している」と続け、この「必要性を示す戦略」は「健常者／知的障害者という二項対立の優位性は固定されていないことを強調する、ディコンストラクションである」という。その上で、主題の「静かな生活」とは、「その外側に相互理解の成り立ちがたい他者が常にいることを意識しつつ、二つのモデルによって、知的障害者の表象、その社会的位置が、少しずつ中心に近付くことが可能な社会生活である」と論じている。

河内の分析は、柴田や島村が「ナラティブ」の次元から読み取った、父Kとイーヨー、ひいては「私」とイーヨーの「権力関係」の「解体」という主題を、「中心」／「周縁」理論を援用し、物語の内容レベルにまで及ぼしたものと捉えられる。だが、イーヨーの「性」の問題は、この図式に即した場合、「中心」への移動可能性を有しない、「周縁」の位置に固定化されたものとして描かれている。

本稿では、以上の先行研究の流れを継承しながら、イーヨーの「性」

を含む、「(夢)や(邪悪な心)」といった「私」を不安定化させる要素を、「大きなストーリー」に回収され得るものとして捉え、『静かな生活』をイーヨーの「性」をめぐる物語として読んでいく。

その上で、大江がいう「自分ら家族が社会と完全に対立する」要因となり得るほどの重要な課題であった、大江光の「性」の問題が、同時代の障害者の「性」をめぐる動向と深く結びついていることも併せて考えていきたい。例えば、「ちえ遅れの人々が健常者より自己制御能力が劣っている」という見方のもと、彼らには「なるべく性的刺激を与えないよう」にし、「永遠の子どもとして純真さを保っていくようにさせよう」という考えが、未だ社会に根強く残っているという指摘や、障害児の性教育には、未だ「一定の方向性が見出せていないばかりでなく、「寝た子をおこすな」式の議論すら残っている」という現状報告など、障害者の「性」を抑圧する社会構造を批判する言説が八〇年代には多く散見される。

大江は、まさにこのタブー視されてきた問題を一作目の「静かな生活」の主題に設定しており、イーヨーの「性」をめぐる懊悩を抱える「私」の不安定な有り様を中心に描いている。作中に叙述される、「新聞の知恵遅れ青年の性的「暴発」キャンペーン」という文言が端的に示すように、そこには障害者の「性」を「安心」できないものとして捉える社会的な風潮、物語の叙述に従えば、「一般的な先入見」や「通俗的な」見方が存在しているのである。

既述した通り、大江が「私」の視点を導入したことで、子供達の

生活を前景化し、自己批判を行なっているのであれば、イーヨーの「性」に対する「私」の振る舞いを通して、自らを批判しているはずである。同時代における障害者の「性」をめぐる言説と、緊密に連関している小説『静かな生活』において、「私」に仮託されたイーヨーの「性」に関する批判性とは何か。その点を検討していくうえで、まずは一作目の「静かな生活」に対する考察からはじめていきたい。

2. イーヨーの「性」——「私」が〈見る〉・〈臭う〉・〈聴く〉こと

一作目の「静かな生活」において「私」は、イーヨーの「キン」（男性器の隠語）が伸びなくなったことに「安心」感を抱くKの態度に対し、「反撥」するものの、結局は「よくわからないまま、感だけでは」「安心だとはいいたくない気がする」という、曖昧さを抱えている。そんな「私」の認識が、「狂信者」の「痴漢事件」を契機に、徐々に「一般的な先入見」や「通俗的な」見方に侵蝕され、イーヨーの「性」を「安心」できないものとして規定してしまう方向へと変化していく過程を、「静かな生活」は描き出している。本節では、「一般的な先入見」や「通俗的な」見方に「反撥」していた「私」が、いかにイーヨーの「性」に対し懊悩を抱え、それを乗り越えていくのかを考察する。

そこではまず、作中における「狂信者」の「痴漢事件」と「私」

との係りについてみていこう。「狂信者」と対峙する「問題の日」に、「私」は家の門のうえに置かれた「水の瓶」を手に取り、それを「狂信者」に返そうと自転車走らせろ。そこで看取したのは、「古いお屋敷の、コンモリと刈り込んだヒイラギ木屑の生垣が続いているはずれの、こちらは手入れの悪い隣のお屋敷の檜葉の生垣との境い目に、もつれあっている大小ふたつの人影」であった。女の子を「踏んばった脚の間にしゃがみ込ませている」「狂信者」に対し、「私」が「リンリンとベルを鳴らしながら」威嚇すると、「レイコンコートの男が茶色の点の眼でじっと見つめ」てくる。物語では繰り返して、「茶色の点の眼」「点の眼」「熱病の鯨のような感じの茶色の点の眼」といったかたちで強調される。

阿部公彦は、障害者の「性」を見ずに「危険なもの」というレッテルを貼る社会に対し、「私」が「反撥」する人物であるがゆえに、「彼女は「見る」こと」において徹底的になる」と述べ、「見る」こと」ここでは「私」によって「狂信者」から〈見られる〉という行為が前景化されていることにも注目したい。「痴漢」行為をする「狂信者」は、常にその対象となる女性を〈見る〉存在であり、それは「私」においても同様であるからだ。こうした〈見る／見られる〉という視座をめぐる関係性のなかで、その場から逃げ出す「狂信者」を追跡する「私」は、実際のところ、「距離を置いたまま自転車を停め

て睨みかえ」すことしかできなかったが、これは「狂信者」と「私」の〈見る／見られる〉という位置関係を反転させる行為として重要な意味をもつ。「狂信者」が要求しているのは、あくまで「性的な対象を〈見る〉立場であり、〈見られる〉立場は放棄しているからだ。そのことを象徴する手段が、「狂信者」の用いる「顔面放射」である。

すなわち、「顔面放射」することで〈見られる〉位置を消失させ、一方的に相手を〈見る〉位置に自らを固定しようする「狂信者」は、「私」の方を「ジッと」見ることをやめないことで、〈見る〉立場を維持しようとする。だが、「私」は「狂信者」から一定の距離を保ちつつ、「睨みかえ」す。そして、彼が拒む〈見られる〉立場を維持し続ける。ゆえに、「私」は「顔面放射」されることを回避し、「スカート」の前に「瓶の水」を零すのみに留まることができたのである。

この〈見る／見られる〉という視座をめぐるせめぎ合いは、物語における「私」の〈見る〉行為の重要性を喚起させる。それは物語に頻繁に登場する「一般的な先入見」という文言からも理解できる。「一般的な先入見」と一般的な先入観とは同義語であるにもかかわらず、物語ではもっぱら〈見る〉方の漢字が採用されているからだ。とはいえ、本節の冒頭でも述べた通り、物語における「私」は不安定な様相を呈しており、それは「私」の〈見る〉世界に対しても同様である。

近所で「痴漢事件」が起きた翌日、イーヨーと出かけた「私」は、彼をひとり残し、「いつも駅前へ往復する道筋を守ってイーヨーが歩いてくれる」のかを確かめるといふ「実験」を行う。だが、「私」の期待とは裏腹に、「女の子を捕まえると生垣の窪みに押しつけ」て犯行におよぶ「狂信者」のように、「古いお屋敷の、ツツジ中心の吹寄せの生垣で、夏の茂りのままデコボコになっているところに、兄は右肩をぐっと突き入ると姿を隠すように立ちどま」る。「実験」を行う前日の「痴漢事件」が起きた折に、イーヨーのシャツから漂ってきた「よく茂った植物の青くさい匂い」。これが「実験」によって「懊悩の直接的物的証拠」として検出されたために、「私」は「女の子を捕まえると生垣の窪みに押しつけ」る「狂信者」とイーヨーとを重ね合わせてしまったのである。

つまり、イーヨーの「性」に関する「私」の懊悩は〈見る〉／〈臭う〉という二つの感覚器から得た情報によって形成されていたといえよう。そして物語には、これらの情報によって、イーヨーの「性」を「安心」できないものとして捉えた「私」の有り様に対し、批判的に描かれている箇所がある。

あの殴られて泣き声も出せなくなっていた女の子同様、私もわずかな抵抗すらできず、小さな瓶につめたいつまでも腐らない水が目にも鼻に注ぎかけられる……

「瓶」のなかに入れられた「水」は、「私」の「目に鼻に」、すなわちイーヨーの「性」を危険なものとして捉えてしまった「私」の視覚と嗅覚とに「注ぎかけられる」。「狂信者」は、「顔面放射」という手段で対象の〈見る〉立場を喪失させるように、「一般的な先入見」というフィルターをかけてしまった「私」の〈見る〉行為と、「青くさい匂い」を「懊悩の直接の物的証拠」とした〈臭う〉行為の双方が、ここでは批判的に描出されているのである。

では、視覚と嗅覚とを介さないで、何を頼りに「私」はイーヨーのことを理解すべきだったのか。残された感覚器官はいくつか挙げられるが、なかでも特筆すべきは、聴覚、つまり〈聴く〉ことである。

近所で「痴漢事件」が起きた際、「パトカーのサイレンが四方からワツと押しよせるようであった時、私はすっかり空になるほどのショックを受けた」「パトカーの警報が様ざまにかさなる仕方でもり響いている」といった具合に、「パトカーのサイレン」が繰り返り叙述される。「私」は、この音からイーヨーと「痴漢事件」との繋がりを連想したわけだが、注意すべきは以下の叙述である。

父と母が出発して十日目の夕方、パトカーが、兄の記憶している場合とはちがいで、おおいに叫び立てて、私たちの家からわずか離れた一郭に押しよせる騒ぎがあった。

近所で「痴漢事件」が起こった際、「パトカーのサイレン」を「おおいに叫び立て」るような音と捉える「私」と、そのようには「記憶」していないイーヨーとの間には、聴覚による情報のズレが存在する。だが、このズレは結末部において修正されると同時に、「私」の懊悩は取り除かれる。

物語の終末部、「狂信者」の逮捕に役立った「私」は、イーヨーを連れて出かけたが、帰り道に彼は「吹寄せの生垣のお屋敷への四つ角」を進み、「ツツジの生垣の窪みに肩を入れて立ちどまつて」しまう。そこで「私」が眼にしたのは、彼が「生真面目な顔で耳を澄ましている」光景であった。イーヨーが「古いお屋敷の、ツツジ中心の吹寄せの生垣」に「右肩をぐつと突き入れると姿を隠すように立ちどまつて」いたのは、そこから流れてくるピアノの旋律を聴くためだったのである。

〈見る〉ことと〈臭う〉ことの二つ感覚器官を「瓶」のなかに含まれた「水」によって塞がれ、入って来る情報を遮断された「私」。その意味で、「顔面放射」から免れた聴覚器は、イーヨーのことを理解するのに必要な手掛かりとして、一作目の「静かな生活」の段階で示唆されていたといえる。『静かな生活』において、イーヨーは、作曲家としての一面をもち、彼にとつて「音楽」は「外に開く通路」として、また「音楽」の構成要素である「音符」は「音楽の言葉」として示されているからだ。物語の最後は、「私」が「音楽」を聴くイーヨーの様子を看取し、かつ自らも同じ「音楽」を聴くこ

とにより、懊惱が取り除かれたかのようにして終わりを迎える。

だが、イーヨーの「性」に対する「私」の「不安」は払拭されていない。次節で考察するように、六作目の「家としての日記」において、「私」は「水泳」を通し、イーヨーの「性」を抑圧してしまっただ。

3. 「躰をクロス練習」——去勢されるイーヨーの「性」

六作目の「家としての日記」において、「新井君」という人物が、イーヨーの「水泳」コーチを担う。だが、彼の泳ぎ方は、「野卑で酷たらしいほどの感じ」で、見る者に「一種の自己処罰」を受けているような印象を抱かせるものだった。そうした「躰をクロス練習」を行う彼のもとで、イーヨーの「性」は抑圧される。いわば「私」は、仮にイーヨーの「性的な「暴発」が起こった際に用いられるであろう「伸びた「キン」」を、「水泳」という手段によって去勢、「新井君」の言い方に従えば、「躰をクロス練習」をさせてしまうのである。

では、なぜ「私」はイーヨーに「水泳」を習わせようと目論むKに対し、「反撥」していたにもかかわらず、そのような行動を取ってしまったのか。

『静かな生活』において、イーヨーの「性」は、「キン」という

「万能の用語」ひとつに置き換えられることで、その特徴や性質といった固有性を剝奪され、「愉快な冗談めいた出来事として処理」される。「私」はこのKのやり方に「抵抗感」を抱くが、「私」の語りのなかで「キン」という「万能の用語」は採用される。「私」にしても、イーヨーの「性」は「キン」という隠語なしには語れないのだ。この「キン」という「万能の用語」のように、Kが開発した隠語として留意すべき言葉が、「発作ゲリ」である。

——イーヨー、発作ゲリかな？ よし、がんばってトイレに行こう！ 途中であきらめるな！ 発作ゲリを、もらしてしま
うな！ ……よし、間にあった、大成功の発作ゲリ！

「キン」と同じく、「発作ゲリ」という言葉に「抵抗感」を抱く「私」は、その言葉で「愉快なお祭りのようにはやしたてるのは行き過ぎではないか」と述懐するが、てんかんの発作が起きた際、彼の身体は「私」から「小さな蚊トンプのような手足をした熱く臭い息を吐く悪魔」「大きい張りボテ人形」といったかたちで別のものに置き換えられ、「金属的な強い臭い」を嗅がれる。「悪魔」や「張りボテ人形」という非人間的な表象は、その状態にあるイーヨーのことを拒みたくなる傾向が「私」の内面に潜在していることを暗示しているよう。「私や母の体力ではどうすることもできない」「発作ゲリ」（てんかんの発作）は、「キン」と同様にイーヨー自らが統制困

難な事象として、また「私」自身も「あつかいにく」い問題として描かれているのだ。イーヨーを管理可能な状態に留めておくこと。これこそが、「私」がイーヨーの「性」を抑圧してしまった背景として想定されよう。

では、なぜ「私」はイーヨーの「性」を管理可能な状態に留めておきたいのか。確かに、一作目の「静かな生活」において、「私」はイーヨーの「性」に関する「懊悩」を抱えていたが、それは結末部で一旦は解消されたはずである。この問題を紐解くうえで重要な人物が、「新井君」である。「新井君」は「私」の代理としてイーヨーの「性」を抑圧する役割を担う人物、つまり「私」の無意識の欲望を現実化する人物として登場するからだ。

「新井君」の内面には二種類の欲望が潜在する。一つが、「私」の見た「未来のイーヨー」が介添人として私の脇に立っている夢」を現実化することである。「静かな生活」の冒頭部、将来「私」は、「2DKのアパートを手に入れられる人のところ」で、イーヨーと「静かな生活がしたい」と、自身の願望を両親に打ち明けており、その夜に見た夢には、花婿が空白のままその存在は明示されない。ところが、「家としての日記」における夢の情景は、

新井君の準備してくれた新居は都営住宅の2DKなのに、建物の地下に降りると三コースの細長い二十メートルプールがついている。しかも私たちの部屋の専用らしく、植木さんも練習に

来ていられた。もとより兄は新井君のコーチで幾度もターンシでは泳ぎ続け、場所に不似合な花嫁衣裳の私は、ビシヨビシヨのプール・サイドで凋んだ花束を抱えて途方にくれていた。

と描写されるように、「新井君」が「私」の花婿として登場する。

また、「静かな生活」における夢の世界は、「寂しくガランドウの場所」に「私」とイーヨーが佇むという荒涼なイメージに対し、「家としての日記」における夢の世界は、「都営住宅の2DK」の新居なかに「三コースの細長い二十メートルプール」が設置され、「新井君」のもとで、イーヨーが「幾度もターンしては泳ぎ続け」る、というイメージへと変化している。『静かな生活』において、「私」の内面には一貫して、将来イーヨーと共に「お嫁に行く」という欲望が潜在していたといえよう。「未来」の様子を象った夢においても、イーヨーが「躰をクロス練習」を行うビジョンをみる「私」。彼の「性」を管理可能な状態に留めておきたい背景として浮かび上がるのは、将来的にも彼と共に生活したいという、「私」の欲望にほかならない。

そしてもう一つが、Kの小説における、「女性の下腹部を剥き出しにさせ、足を尻の両側にM字型に縛って、*****を露出させた」という一節を現実世界で実演することである。かつてKは、過去に起こったクルーザー事件と「新井君」のノートをもとに、一つの小説を書き上げていた。現実が起こったクルーザー事件の内実と、異

なるかたちの設定を作り上げたKは、虚構の力を借りて、物語に登場する「青年」（＝「新井君」）を救済するために、「五十男」という人物を登場させたのだが、Kは小説のなかで、「新井君」を性犯罪者として造形していたのである。この現実と虚構の世界に置かれた自身の乖離した自己像を受け入れられない「新井君」は、復讐の意味を込めて、小説で描かれた性犯罪の手法を、Kの娘である「私」に対して実際に行おうと画策する。

新井君の言葉。イーヨーと一緒に嫁に来る夢を実現したいなら、すぐにでもここに移って来ればいい。（…）新しい関係になつたしるしに、水着で覆っていた部分だけ見せてもらえばいい…… わずかにあるかないかだと水着の上からでもわかる胸はけっこう、下腹部を見たい……

いうまでもなく、「狂信者」／「私」という、内容的には、性的な眼差しを向ける者／向けられる者という構図が、「新井君」／「私」の関係性と呼応している。ただしこの一件は、既述した一作目の「静かな生活」における「狂信者」の一件と、その内実を大きく異にしている。

一作目の「静かな生活」のなかで、イーヨーの〈聴く〉行為の重要性が示唆されていたことは既述した通りだが、「家としての日記」における「新井君」は、イーヨーの〈聴く〉行為を巧みに利用する

人物として象られている。「新井君」のイーヨーに対する「水泳」の教え方は、「入水、プル、プッシュ、リカヴァリ、入水、という順序の、いかにも兄が楽しめそうな繰り返しの言葉」が用いられているからだ。また彼が、「私」の見た夢の内容を知っていたのは、実は、イーヨーからその情報を事細かに聞き出していたことによるが、おそらくそれは、〈聴く〉行為を巧みに利用する「新井君」だったからこそ成功したのでだろう。そして両者を連れて部屋に到着すると、「クラシックなら向こうの部屋に沢山あるから」と言つて、イーヨーだけを別の部屋へと誘導したのである。

このような「新井君」のもとへ、イーヨーを連れて結婚し、そこで彼の「性」を抑圧するという、無意識レベルの「私」の欲望を象徴する夢の行く末に待っていたのは、Kの小説に書かれた「女性の下腹部を剥き出しにさせ、足を尻の両側にM字型に縛って、***を露出させた」という一節を実際に行おうとする「新井君」との生活であった。いわば「新井君」は、「狂信者」のように、イーヨーの「性」を抑圧しようとした「私」の行為を批判する者として位置づけられていたといえよう。

すなわち、イーヨーの「性」を危険視し、抑圧することが、皮肉にも一種の性暴力のかたちとなって「私」自身に跳ね返ってくるという筋に、『静かな生活』は構造化されているのである。換言すれば、物語における「狂信者」や「新井君」の一件は、障害者の「性」を否定的に捉えることを批判する寓話性を含んでいたといえよう。

「新井君」が行う「躰をクロス練習」が「自己処罰」という言葉を想起させるものとして描かれていたように、『静かな生活』は、いわばイーヨーに「躰をクロス練習」をさせた「私」に対し、一種の「自己処罰」が下される物語だったのである。

だがこの一件で、イーヨーの「性」が抑圧される危険性が払拭されたとはいえない。「頭痛で寝ている」「私」の代わりに、「私が簡略化して話した」ことを渡米先の母に伝えるオーちゃんは、イーヨーの「水泳」に対し、次のように述べているからだ。「当面、イーヨーは水泳を休んでいるが、躰で覚えたものは忘れないから、再開すれば大丈夫泳げると思う」と。「躰をクロス練習」によって、彼の「性」が抑圧された痕跡は、その後も見えない跡として残り続けるのである。

4. マーちゃんの「性」——ズレてゆく思考と身体のリズム

本稿では、これまで『静かな生活』をイーヨーの「性」をめぐる物語として読んできた。では、イーヨーの「性」の問題と、『静かな生活』における「ナラティヴ」の問題とはいかに結節するのか。島村のいう通り、「私」の語りの特権性を脱色することが、大江の「ナラティヴの手法」だとすれば、「私」はイーヨーの「性」を通して、語り手である自らの立場を不安定化させてしまっているはずである。

本節では、そのことを検討するうえで、「私」の身体性の変化に注目し、『静かな生活』を読み直していく。すると『静かな生活』は、「私」の「性」の問題を描いた作品としての相貌を帯びてくる。そこでまずは、『静かな生活』に所収されている全作品のなかで、「私」の身体性が色濃く描写されている、四作目の「自動人形の悪夢」をみていこう。

「自動人形の悪夢」は、イーヨーに対して依頼心を抱き、「兄についてどこまでも行くこと」の結末が「デッド・エンド」になるという、重藤さんの奥さんの「無言の非難」を受け取ることで、「私」がイーヨー、そして自らのことを「なんでもない人」として自覚する物語である。

私はどうしてこの自分が兄についてどこまでも行くことができる、と無邪気に思い込んだのだろうか？（…）なんでもない人にすぎない私が、ただイーヨーの障害をたよりに、ひとりよがりな思い込みをしていたのだ…… それにしても私のように美しくも強くもなく、とりわけ気が弱くてすぐ自動人形化してしまう、そのようななんでもない人であることの、なんと寂しいことだろう……

三作目の「案内人」の結末部において、「私」はイーヨーを「邪悪な力」をもつアンチ・キリストに当てはめて解釈し、彼に「つい

でどこまでも行こう」という一方的な依頼心を抱いていた。しかし、右の一節にあるように、彼に対する依頼心、及び、「イーヨーの障害」を特権的に捉える認識が改まり、「私」は彼から「なんでもない人」としての側面を見出すに至る。

柴田は、この「私」の回心を『静かな生活』の主題として読み取っていたが、前節で考察したように、「家としての日記」において「私」は、イーヨーの「性」を抑圧する行動を取ってしまうばかりか、彼とともに「新井君の準備してくれた」「都営住宅」に移り住むという夢をみる。「なんでもない人」として「自立した兄」の姿を見出したにもかかわらず、イーヨーの「性」を抑圧し、「未来のイーヨー」が介添人として私の脇に立っている夢」を見る「私」。この矛盾した有り様が物語るのは、未だイーヨーのことを「なんでもない人」と見做すことができない、「自分は妹ながら兄の保護者役を任じている」という深層心理にほかならない。

つまり、こうした〈夢〉や〈邪悪な心〉は、イーヨーの「性」の問題に由来する「私」の無意識の欲望と考えるべきであり、本稿が、島村のいう「私」を不安定化させる〈夢〉や〈邪悪な心〉といった、「大きなストーリー」に回収されえない要素を、むしろイーヨーの「性」をめぐる「大きなストーリー」に回収され得る要素として捉える所以である。

そして、ここでは「私」が自らのことを「なんでもない人」のなかでも、「美しくも強くもなく、とりわけ気が弱くてすぐ自動人形

化してしまう」人物して認識していることに注目したい。「案内人」において、映画『ストーカー』を見た「私」は、そこに登場する案内人の奥さんの苦しむ様子に対して、「映画館の予告編でつい見ってしまう」成人向け映画の、欲望に苦しむ妻というタイプのシーン」と感想を述べる。さらに、「暗い情熱をひそめている美しい人で、発作を起こしたように床に倒れて苦しむ際も、静かに姿体の全体が美しい」という。

このように「私」は、彼女の「官能的な美しさ」をもつ身体に対して憧憬の念を抱いているのだが、自身の身体が「こんなに美しい躰になることはあるまい」という、一種の諦めの気持ちから性的な身体性を認めていない。「自動人形」という機械的な表象は、「私」の身体性を象るのにふさわしいものとなっていよう。

こうした「私」の認識は、「家としての日記」の舞台である、水泳クラブという自他の身体性の特徴を際立たせる環境のなかでより作用する。例えば、「私」は、プールで泳いでいる最中に、植木さんという「私」がこれまでみたことのないほど肥った人に遭遇した際、「苦しげに自分をきたえている」様子について、「気泡も立てない両足の、悶えるような動きをまぢかに見るのを不謹慎なように感じる」。物語において、水泳クラブに登場する女性のなかで固有名詞を与えられ、かつ、それが継続的に語られる存在は、この植木さんに限る。水泳クラブの場で、「私」が向ける女性への眼差しは、常に「憂鬱そうな」表情を浮かべながらも、自身の「肥った」身体

に向き合う植木さんに集中していると考えられよう。思えば、「未
来のイーヨー」に関する夢において、「私」やイーヨー、新井君の
他に、多くの登場人物がいるなかで唯一、植木さんだけが召喚され
ていた。

しかし、この眼差しが意味するのは、単に「私」と植木さんとの
身体性の繋がりでだけでない。そこには「誰に対しても親しげでない
かわり、新井君に差別的でもない態度」をみせる植木さんの有り方
が関係している。

ある日、「私」とイーヨーは帰り道に「新井君」と出会い、彼の
車で自宅まで送迎してもらう。子供達の私的空間に踏み込んだ「新
井君」の行為に不信感をもつ重藤さんは、そのことを問い詰めると、
逆上した「新井君」に暴行されてしまう。この暴行事件の後、「新
井君の乱暴はひどい」と認識しつつも、決して「新井君」に差別的
でなく、「常連のみんな」が示す批判的な在り方を打ち消そうと、「な
にくそ、なにくそ！」と「反撥」する「私」は、「新井君に過度に
アンフェアではないように」と心掛けるあまり、二つの「新井君」
像の間で揺れ動く不安定さを抱えることになる。だがそれは、「暴
力」的な「酷たらしい新井君」と、「性犯罪者」という汚名を着せ
られて、「苦しい自分を理解してもらえない」「新井君」との分裂し
た他者像の振幅だけによって生じたものではない。

手前の黒川という表札と、私とイーヨーが招き入れられた新

井という表札の部屋と、鍵をふたつ新井君が持って出ていた以
上、黒川さんの奥さんはお留守のはずと感じて、防禦態勢をか
ためる気持ちでいながら、なお私がそこから引き返さなかった
のは、イーヨーがいかにもいそいそと部屋の上って行ったこと
もあるが、この日の私の態度はその全体で混乱していたのだ。

「新井君」に部屋へ連れて行かれた際、「私」は「自動人形化し
そうなどころをなんとか踏みとどまろうとし」、「防禦態勢」をとる
ように、彼の背後に潜む「性犯罪者」の可能性を想起する。自身の
身体に魅力を感じず、「官能的な身体」とは程遠いものと自己規定
する「私」にとって、頭によぎる「性犯罪」の影は、「私」の身体
性に対する思考を攪乱し、「自然体ではな」い状態へと陥れる。「新
井君」の部屋の前から「引き返さなかった」原因としてある「私」
の「混乱」した状態とは、「私」の身体性に対する自己像と、「新井
君」の性的な欲望を想起し、それを内面化して投影された自己像と
の乖離によってもたらされたのだ。

そして「家としての日記」では、「狂信者」と対峙したときと同
様、「新井君」の一件の後、「私」は「発熱」して起き上がれない状
態になる。「官能的な美しさ」が備わっていないと思ひ込み、とき
に「自動人形」という機械化された表現で埋め尽くされた「私」に
とって、「新井君」や「狂信者」の一件は、「私」の身体性に対する
認識にあるズレをもたらす。このズレとは、他者から見出される性

的な身体性と、意識的に身体に宿る性的な側面を放擲し、自己認識を試みる思考パターンとの不整合にほかならない。最終的に「私」の身体が「熱」を帯びて通常通りに動かなくなってしまったのは、このズレが臨界点に達したことにより生じたのである。

以上のことから、「官能的な身体」とは程遠いものと自己規定する「私」は、「性」を自己の認識によつて管理可能な固有の問題として把握していたことがわかる。だが「私」は、「新井君」や「狂信者」といった自身に性的な身体性を見出す他者との関係性のなかで、思考と身体のリズムを崩し、最終的に「発熱」して動けなくなってしまう。「性」は自己完結的な固有の問題としてあるのではなく、ときに性的な欲望を抱く他者との関係性のなかで変容する。「静かな生活」は、イーヨーの「性」の問題を描いていると同時に、「私」の「性」の問題をも描いた作品なのである。

5. おわりに

本稿では、『静かな生活』を、イーヨーの「性」を危険視し、抑圧することを批判する寓話性を含んだ物語として論じてきた。いわばKの代理として、イーヨーの「性」を抑圧した「私」を批判するという筋に、物語を構成した大江が自らに与えようとしたのは、柴田がいう「イーヨーの共生者として振舞わざるをえなかった娘の身振り」ではなく、イーヨーの「性」を抑圧した「娘の身振り」だっ

たのである。

こうしたとき、かつて大江が「障害を持っている子供を、家族のなかに積極的に受け入れること」を「これから生きてゆく基本の私たち」とし、それを「地域社会」、ひいては「社会へのメッセージ」となりうるものまで確かなものとする」と述べていた(12)ことが想起される。「障害を受容した家族」の在り方が、「障害者を受容した社会」というイメージを想起させるうえで重要であると説くこの主張には、「家族」を重要視する大江の思想が如実に表されている。

大江は、前掲「家族のきずな」の両義性」のなかで、「家族」を「人間と人間、人間と社会、あるいは世界との関係、あるいはそのアイデンティティの具体的なモデル」として考えているからだ。「ある個人が社会のなかでどう生きていくかという場合の、社会的人間として自分を自覚するためのモデル、あるいは国家のなかでどのように生きるか」といった、「人間の生き方のモデル」の根底に、「家族」を据え置いているからこそ、「障害を受容した社会」というイメージ」を浮かび上がらせるうえで、「障害児をふくみこんだ家族のあり方」が必要だと述べているのである。

だが、イーヨーの「性」を抑圧してしまう「家族」の在り方は、大江がいう「障害を受容した家族」の在り方とは相容れないものとして描かれていよう。大江の発言通り、「家族」が社会や国家で生きていく基本的な「モデル」であるならば、イーヨーの「性」を抑

「静かな生活」は、同時代における障害者の「性」を抑圧することを批判する、一種の「モデル」を描いていたといえようか。

ただし、イーヨーの「性」を抑圧した痕跡は、その後も見えぬ可能性として残り続けることから、彼の「性」は今後も抑圧される可能性がある。その限りで、こうしたイーヨーの「性」の問題を抱えた「家族」は、河内がいう「知的障害者の表象、その社会的位置が、少しずつ中心に近付くことが可能な社会生活」などではなく、むしろ「中心」へ移動可能性を有しないものとして描かれていると考えられよう。「静かな生活」における「家族」の「モデル」からは、容易に解決され得ない、同時代の障害者の「性」をめぐる課題が透けてみえるのである。

また、『静かな生活』はイーヨーの「性」を描いているのと同時に、「私」の「性」の問題をも描いた作品であった。だとすれば、『静かな生活』は、「私」の書いた「家としての日記」の改訂版という体裁をとっているため、語り手であり、書き手である「私」は、イーヨーの「性」を描いていたと同時に、自らの「性」の問題をも曝け出してしまっていたことになる。言い換えれば、『静かな生活』は、イーヨーの「性」の問題を触媒として、自らの「性」の問題を語ることに繋がるといって、いわば、合わせ鏡の構造を呈しているのである。「私」がイーヨーの「性」を一方的に語る主体として位置づけられていない点で、「私」には語りの特権性が与えられていないと

いえよう。「静かな生活」は、兄妹の「性」の問題を通し、「私」が揺動する不安定な有り様を前景化することで、娘の語りの特権性を無化した作品なのである。

注

- (1) 大江健三郎『大江健三郎 作家自身を語る』（新潮社、二〇〇七年五月）
- (2) 大江健三郎「著者とその本 『静かな生活』の大江健三郎」『『新刊展望』一九九〇年二月）
- (3) 大江健三郎「続・大江健三郎「未来を愛する人の物語」——最初の小説、新しい小説家のために」『文学界』一九九〇年九月号）
- (4) 大江健三郎「家族のきずな」の両義性」（『あいまいな日本の私』岩波書店、一九九五年一月）
- (5) 大江健三郎『静かな生活』をめぐる二通の手紙」（『ゆるやかな絆』講談社、一九九六年四月）
- (6) 柴田勝二「他者の変容——大江健三郎における共生」（『敍説』一九九一年八月）
- (7) 島村輝「『静かな生活』——〈ファミリー・ロマンス〉を超えて」（『国文学——解釈と教材の研究——』一九九七年二月）
- (8) 河内重雄「大江健三郎『静かな生活』論——知的障害者も共に生きる社会のモデルの考察」（『日本近・現代文学における知的障害者表象——私たちは人間をいかに語り得るのか——』九州大学出版会、二〇一二年三月）
- (9) 平山尚『障害者の性と結婚』（ミネルヴァ書房、一九八五年）

二月)

- (10) 服部祥子編『障害児と性―思春期の実像―』（日本文化科学社、一九八九年七月）
- (11) 阿部公彦『モダンの近似値―ステイヴンズ・大江・アヴァンギャルド』（松柏社、二〇〇一年三月）
- (12) 大江健三郎、大江ゆかり「障害者の十年」（『恢復する家族』講談社、一九九五年二月）

【附記】

本稿における小説の引用は、『静かな生活』（講談社、一九九〇年一〇月）によった。引用中の「…」、／は筆者による。また、本文中における『静かな生活』と「静かな生活」の括弧の使い分けについては、『』を『静かな生活』に所収されている作品全体を表すものとして、「」を一作目に配置される短篇作品「静かな生活」を表すものとして使用している。なお引用に際して傍点・ルビを省略する等の改変を適宜加えている。

（まつもとたくま 本学大学院博士課程後期課程在学学生）